



紙本金地着色 江戸時代(十七世紀)
本紙各八九・六×二七〇・〇

右隻に十九羽、左隻に八羽のナベツルを描く群鶴図である。金箔地の上に墨を主体として直に描かれており、墨を薄く下塗りして羽の表現を描く箇所では、その下の金がうっすらと透けてポリウム感を加えている。頭から頸にかけても細い線で白い羽毛の表現を丁寧に描写している。嘴は淡い黄緑色で、額から頭頂部は茶褐色、目も明るい茶褐色に墨で丸い眼球を描く。脚は白色(胡粉か)の上に薄墨を施して灰色とし、墨で表情をととのえるという、ほぼ同一の描写方法である。また、鶴の形態もほぼ似通った幾つかの型によるものであるが、むしろその規則的な中で、鶴の配置や形態のわずかな変化が、全体をあっさりともまとめ、金地に黒と白というモノクロ主体の表現とも融合して、洒落た画面を作り上げている。群鶴を描くものとしては、本阿弥光悦が和歌を認めた俵屋宗達の下絵が初期のものとして知られ、その後、尾形光琳や鈴木其一の作品がある。また鶴沢派の石田幽汀の群鶴図屏風も、琳派の装飾性が看取される作品として知られるが、本図は、こうした琳派の作品に通じる初期的なものとして興味深い。

現状では、上下にそれぞれ二・五cm幅の裂地が貼られて総高一三七cm余の六曲一双屏風となっているが、手垢による汚損が本紙上部を中心に付着し、下部にはない状態からは、現状に仕立てる際に下部を裁ち切ったと考えられる。ただ、裁ち切られた部分はさほど大きくはないと考えられ、現状前は縁裂のない腰屏風のような小さな屏風として、長く使用されていたものと推察される。しかし、本屏風の構図は、左右の意識が感じられないこと、右隻中央の二扇は全体の汚れが特にひどいこと、左隻第一扇には横擦れ痕が多く、右端中央よりやや下には金具が付いていた痕はないかとみられる痕跡があること、左隻の第一〜四扇までと五〜六扇の絵の間で紙継ぎの段差が生じていること等、本屏風の絵が、本来屏風ではなかったこと、現状のように連続していなかったことを示唆する状態もあり、当初は、現在の状態とは異なったものであった可能性が窺える。





右隻部分

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花鳥―愛でる心、彩る技（若冲を中心に）

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 40

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年三月二十五日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections